

聴覚障害者におけるカウンセリング来談妨害要因の解明

—聾学校高等部生徒へのインタビュー調査から—

Elucidation of hindrance factor in the deaf counseling

— From interviews to the Deaf high school student —

勅使河原 由季

人文科学研究科

臨床心理学専攻

Yuki tesigahara

Graduate School of Humanities Division of Clinical Psychology

要約

本研究の目的は、青年期にある聾学校高等部の生徒を対象として、面接調査を行い、現在のカウンセラーやカウンセリングに対するイメージ、聴覚障害者が考える聴覚障害を専門とするカウンセラーに求めることなど、彼らの来談選択に伴う妨害要因を明らかにすることであった。予備調査では、質問項目の内容が伝わり易いものか、目的に沿った質問ができていないか等、本調査で使用する質問項目の作成と改善および面接構造の設定をするためY特別支援学校に在籍する高等部生1名に口話と筆談による面接調査を行った。予備調査で得られた結果を基に、本調査では、2名の手話通訳士を介した半構造化面接を、X県立聾学校に在籍する4名の生徒に対して行った。本調査では主に、カウンセリングやカウンセラーのイメージ、聴覚障害専門のカウンセラーについて、カウンセリングでの手話について、自分自身がカウンセラーだったとしたらの4点を中心に質問を行った。面接調査で得られた結果を事例研究として聴覚障害者におけるカウンセリング来談について考察した。その結果、妨害要因として次の5つが考えられた。①カウンセリングに関する情報の少なさ、②カウンセラーが身近な存在でないこと、③カウンセラーの聴覚障害への理解不足、④ことばの問題、⑤カウンセラー側の先入観が作り出す壁。

【キーワード】聴覚障害者 心理的援助 カウンセリング

I 問題と目的

1. はじめに

近年、カウンセリングは新生児から高齢者に至るまでの様々な領域において身近なものになってきている。特に学校現場ではカウンセラーの専門性が強く求められるようになってきたと思われる。

2. 聴覚障害者を対象とする研究の少なさ

聴覚障害をもつ児童生徒や学生も、その障害から派生する様々な問題を考えるとき、発達障害と同様に、心理的な支援が必要とされ、その重要性も十分に考えられる。

しかし、未だ聴覚障害者への心理的援助

および心理臨床面接報告は他の分野に比べ、圧倒的にその報告は少ない。

聴覚障害者に対する心理的援助や臨床心理学的研究に関心が集まり注目されるようになってきているものの、わが国における聴覚障害児・者に対する心理臨床は途上についたばかりであるとしている（村瀬、1999）。また滝沢（1996）は、精神科で治療をうけている聴覚障害者の特徴や、治療場面での聴覚障害者のコミュニケーションの実態について報告した際に、聴覚障害者への無理解やコミュニケーションのむずかしさからの誤診の可能性や、手話ができる治療者の少なさの問題を取り上げ、聴覚障害者の精神医療の遅れを指摘している。

3. 聴覚障害者の心理臨床

藤巴（2001）は、従来の研究では、「ろう者」あるいは「聴覚障害者」という名のもとに一括りされてきており、難聴者、中途失聴者、高齢者など、ろう教育の対象外にある一群については関心がよせられてこなかったことを指摘し、その上で「聴覚障害」という一括りではなく、対象の細分化と多様化の重要性について述べている。

コミュニケーション手段についても、聴覚障害者をとりまく環境や教育によってさまざまである。

4. 聴覚障害者の心理的援助におけるコミュニケーションの壁

現在、日本では専ら健聴者が占める援助者と、対象者との間にコミュニケーションの壁が大きく立ちだかっているということである（藤巴、2001）。

GlickmanとHarvey（2010）は、米国と

英国からの関連論文の調査の中で、心理療法での聴覚障害者の対象と臨床医の間に起こりうるコミュニケーション問題には、コミュニケーション手段の違いによることが信頼感に影響を大きく及ぼしているとしている。

田中（2012）は、心理面接というより適切な治療環境を設定することは場が安全基地となる必要があり、そのためにクライアントに応じたコミュニケーション手段の保障は欠かせないことの重要性について述べている。

5. 聴覚障害者の心理臨床の問題と課題

治療者とクライアントのやりとりは常に音声言語であることを前提として疑うことなく心理療法が提供されている現状がある。

しかし聴覚障害者とのかかわりの中では、そうした前提について再考を迫られる事態に治療者は身を置くことになる（田中、2012）。

一般的な意味での心理療法や心理アセスメントには音声言語が前提とされている。

この前提が、聴覚障害者の文化に開かれることなく、結果として、治療環境が整わずに、ケースの中断や終了といったことが少なくないと思われ、そうしたことがケース報告の少なさに表れているのかもしれない（田中、2012）。

そもそも、聴覚障害者がカウンセリングのニーズを感じ、その機会を得ようとした際、身近に情報があるか、カウンセリング機関への連絡手段は何か等、治療者が“あたりまえ”としているところに、聴覚障害者への壁を作っているのかもしれない。

藤巴（2001）は、聴覚障害者を理解するときの課題として、障害についての診断的視点により理解ではなく、心理臨床的援助といった双方の関係性が重視される領域においては、文化的視点に基づく理解が重要であり、また有益であると述べている。

聴覚障害者にも開かれたカウンセリングについて考えていくために、現在の聴覚障害者の来談に最も妨げとなっているものは、どんなものなのか。聴覚障害者がカウンセリングのニーズを感じても、カウンセリングをとりまく環境そのものが聴覚障害者のカウンセリング来談への抵抗感につながっているのではないだろうか。また聴覚障害について適切に理解し、カウンセラー自身が手話などのコミュニケーションが行える聴覚障害者専門のカウンセラーがいたとすれば、聴覚障害者は来談しやすいのではないだろうか。

6. 目的

本研究では、青年期にある聾学校高等部の生徒を対象として、面接調査を行い、現在のカウンセラーやカウンセリングに対するイメージ、聴覚障害者が考える聴覚障害を専門とするカウンセラーに求めることなど、彼らの来談選択に伴う妨害要因を明らかにすることを目的とする。

なお本稿では、面接調査を事例研究として聴覚障害者におけるカウンセリング来談について考察したい。また聴覚障害者の来談選択に伴う妨害要因ということに重点をおいているため、個々の事例について掘り下げるといよりは、それぞれの発言を基にして妨害要因について考察する。

II 方法

1. 調査対象者

聾学校高等部に在籍する生徒を対象とし、学校や本人から調査協力同意を得られた15～18歳までの男女5名を対象とした。

(1) 予備調査

予備調査はY特別支援学校高等部に在籍する男性1名に対して行った。この結果から得られたデータをもとにした質問項目を使用して本調査を行った。

(2) 本調査

本調査はX県立聾学校高等部に在籍する男性1名、女性3名であった。

(3) 対象者選定について

これらの高等部生を対象としたのは、心理的な悩みを抱えやすい青年期に入る学生であることがあげられる。青年期にある大学生の聴覚障害者も対象とするべきかと思われたが調査協力者確保が難しかったため高等部生とした。

さらにカウンセリングについての質問内容について理解し、自分の考えを述べることができる年齢であることや手話のできない調査者との面接で手話通訳を介しながらやり取りができる、もしくは口話でのやり取りができると考えられたからである。

2. 調査時期

調査期間は2013年6月～8月である。

研究の主旨を理解し同意の得られた調査協力機関及び調査協力者に、調査内容は研究目的のみ用い、プライバシーの保護に厳重な注意を払うこと、調査途中でも中断が可能であり自由意思でインタビューに応じてもらうことなどを事前に文面で説明し、論文に掲載する許可を得た。

(1) 予備調査

予備調査は2013年6月に実施した。実施時間は、2時間であった。

(2) 本調査

本調査は2013年8月に実施した。実施回数は4名に各1回で、1人あたり約30分の面接を個別に行った。

3. 調査手続き

面接調査法で行った。

面接調査では、主に調査者との口話を主として行い、補助として手話通訳を利用した。

面接調査法の中でも、調査対象者への負担や手話通訳者との契約などを考え、半構造化面接を実施した。

実施場所は調査協力先の聾学校、または調査協力者から指定された場所で行った。

予備調査、本調査のどちらも実施前に再度研究の主旨を伝え、個人情報管理および研究目的や面接の流れを説明した書面への署名をもって同意とした。

(1) 予備調査

予備調査では、調査者が用意したフェイスシートや質問内容に実際に答えてもらった後、その内容や言葉の意味が、理解しやすく伝わりやすいものかを確認し、本調査で用いる質問内容を作成および修正することを目的とした。

本調査を行う前に、質問内容の調整や面接の手続きについての確認のために予備調査を行った。予備調査では、面接対象者に年齢、性別、相談歴をフェイスシートに記入してもらった後、カウンセリングについてのイメージ、カウンセラーのイメージ、聴覚障害者専門のカウンセラーがいた方が

よいか、カウンセリングへの要望、手話通訳がいた方が話しやすいかの5項目の質問を行った。

インタビューが終了した後、質問の内容が調査対象者に伝わりやすいものだったか、また調査者の必要な情報は、どのような質問項目にすれば得ることができるか。インタビューの仕方や手話通訳の配置について等、面接対象者に自由に回答してもらった。

調査対象者は口話が可能であったため、調査中は口話や筆談を用いて行った。

(2) 本調査

本調査では予備調査で得られた情報を基に作成および改善したフェイスシートと質問項目を使用した。

対象者間での面接内容をある程度統一するために、面接調査の実施に先立ち、具体的な質問項目をまとめたチェックリストを作成した。このチェックリストは、主に調査者と手話通訳者の面接の構造の整理や把握を助けるものとして用い、質問の枠内であれば可能な限り対象者の語りを尊重することとした。

本調査では、手話通訳を利用した。調査者が口話で話し、同時に手話通訳者が隣で通訳を行った。手話通訳者は、2名の県公認の手話通訳を利用した。通訳者は面接中、調査者の左隣に座り、面接対象者が調査者の口の動きと手話通訳者の手話を交互に見ることのできる形をとった。

手話通訳者の配慮により、わからない単語や手話通訳を読み取れなかった説明についてはどんなことでも教えてほしい旨を伝えた。

4. 倫理的配慮

なお、本研究は、跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理委員会において承認を受けた（申請番号13002）。

Ⅲ 結果

1. 予備調査

本調査実施前に予備調査を行った。予備調査では特別支援学校高等部に在籍するE男（男性）を対象とした。面接の構造や面接対象者との面接方法等について聴覚障害者の視点からの問題点や改善点についての助言をいただいた。

E男は、中学生の時にカウンセラーを利用した経験があり、カウンセリングやカウンセラーという言葉についてスムーズに理解し答えてくれた。また面接場面で「わからない言葉があったら気軽に聞いても良いということを丁寧に伝えた方がいいです。質問も一つ一つ理解できたか、伝わったか、というようなことを確認したほうが良いです。」と伝えてくれ、面接の手段についても面接対象者に合わせて変えた方がよいことや手話通訳を利用することを勧めてくれた。

質問内容の中のカウンセリングのイメージについては、「小学生の時は、母がカウンセラーの人と知り合いだったので利用しました。その先生は手話ができたので手話でやりとりをしていました。今もカウンセリングを利用しようかなと思うときはたまにあるけれど、電話番号しか掲載されていないところは、聴覚障害について理解がないなって思ってしまう。カウンセリングというものは健聴者の人が使うような別世界のように感じて、あえてカウンセリングを

するよりも、家族や先生に話した方が解決するし楽だなと思う。」と答えた。

この予備調査で得られた結果やEからの助言を基にして、フェイスシートには新たに日常でのコミュニケーション方法を記入する欄を付け加え、面接で使用する質問内容は文面などを伝わり易く改善し質問項目としてまとめ、本調査で用いた。

2. 本調査

X県立聾学校高等部に所属する学生A(男性)、B(女性)、C(女性)、D(女性)を対象とした。

面接調査で語られた内容から、質問項目に沿い特に重要であると思われるものを以下に提示する。記録された面接内容はすべて文字に起こし、その全体像の把握に努めた。また、面接中の雰囲気や調査者の所感にも注意を向け、その理解に活用した。なお、個人情報の保護を目的とし、語り手を特定かしてしまう情報については若干の変更を加えている。

また逐語で起こされたものは、口話でのやりとりが可能だった面接対象者以外は、手話通訳者の通訳を言語化してもらうなどした。

口話でのやりとりが可能だった場合も、文章のつなぎ等を本質を損なわない程度に調査者が変更を加えている。

各調査者のフェイスシート結果は、表1にまとめた。

(1) カウンセリングの必要性を感じたことがあり、カウンセリング経験がない
A男

1) A男に対する面接調査

A男は、カウンセリングを利用した経験

表1. 本調査フェイスシート結果

	〈1〉 年齢	〈2〉 性別	〈3〉来談 の必要性 を感じた	〈4〉〈3〉の理由	〈5〉相談 歴の有無	〈6〉“ある” 来談時の様子	〈7〉“ない” の理由	〈8〉日常の会話
A男	15歳	男性	ある	どうやって耳が聞こえる人とコミュニケーションはできるか？	ない		利用する必要がなかった	「家族とは口話でコミュニケーションをとり、学校では手話を使っている。」手話・口話
B子	17歳	女性	ある	悩み事があるときに話を聞いてくれるような存在が必要だと思うので。	ある	(機関) 病院、(利用期間) 1年ぐらい、(利用時の印象) 話しやすかったので、次も利用したいと思えた。		口話・手話
C子	16歳	女性	ある	誰かに言ったりした方が自分もすっきりするし、意見ももらえたりするので。	ある	言ったことをきちんと聞いて自分の身になって考えてくれたりしたので話しやすい印象でした。		口話・手話
D子	16歳	女性	ない		ない			「手話か口話を使っています。」手話・口話

がなく、カウンセラーやカウンセリングについては理解できるものの、どういう場合に利用しどのようなことが自分に与えられるのかを知らないことでどう答えていいか考え込む様子が伺えた。A男への面接調査では以下のような結果が得られた。

2) カウンセリング等のイメージについて

①カウンセラーについてのイメージはどのようなものか。という質問では「悩みがあった時に相談をしいけるイメージ」と答えた。②カウンセリングについてのイメージはどのようなものか。という質問では、「ちょっと難しい」とだけ答えた。

3) 聴覚障害者専門のカウンセラーについて

③聴覚障害者専門のカウンセラーはいた方がよいか。の質問では「良いと思う。」と答え、その理由を「就職したときに、その職場の人と話がうまくいかなかったりしたときに通訳がいると話の内容がわかるから。」と話した。④聴覚障害専門のカウンセラーがいないカウンセリングはどうか。という質問では「いかない。」と答えた。⑤聴覚障害専門のカウンセラーがいたらカ

ウンセリング利用するか。については「自分が十分その人のことを知っているならしたい。」と答え、同じく⑥聴覚障害専門のカウンセラーへの条件や望むことはどのようなことか。という質問でも「自分がその人のことをよく知っている人に相談したい。それだけです。」と話した。⑦聴覚障害専門ではないカウンセラーに望むことはなにか。については、「口を大きくあけて、話がわかりやすい人がいい。」と答えた。

4) カウンセリングでの手話について

⑧手話通訳を介したカウンセリングはどう感じるか。の質問では手話通訳者の介入について、「3人だと言にくい。通訳がいると相談しにくい。2人だったらできます。」と答えた。⑨カウンセリングの中で手話の印象については、「手話ができるとう

まく話が進むが、できないと進まないというイメージがあります。」と答えた。

5) 自分自身がカウンセラーであったら

⑩自分がカウンセラーになったら聴覚障害者にどのようなことをしたいか。という質問には「できれば手話が使えた方がいい

と思う。」と答えた。

(2) カウンセリングの必要性を感じたことがあり、カウンセリング経験がある
B子

1) B子に対する面接調査

B子はカウンセリングの経験があり、カウンセラーやカウンセリングについてはどういふものか知っていると言った。B子はカウンセリングを受けた際には口話でのやりとりを行っており、今回の面接調査の場面でも、ほぼ口話でやりとりを行った。B子への面接調査では以下のような結果が得られた。

2) カウンセリング等のイメージについて

①カウンセラーについてのイメージはどのようなものか。という質問や②カウンセリングについてのイメージはどのようなものか。という質問について「(カウンセラーのイメージは) 優しいというか、相談に乗りやすいというイメージがあります。

(カウンセリングのイメージは) 受ける前は何を聞かれるんだらうってちょっと怖かった。実際に受けてみると怖くなかった。」と来談する前の気持ちと来談後の気持ちの両方を話した。

3) 聴覚障害者専門のカウンセラーについて

③聴覚障害専門のカウンセラーはいた方がよいか。という質問では、「聴覚障害を持っている人にとってはたぶん手話ができの方がいいと思います。」と答え、次の④聴覚障害専門のカウンセラーがいないカウンセリングはどうか。という質問では、「私は手話がなくても会話ができるので大丈夫だと思うけど、私よりも手話が使えなく手話じゃないとコミュニケーションが取

れない人にとってはちょっと不便だと思います。」とその理由を話した。⑤聴覚障害専門のカウンセラーがいたらカウンセリング利用するか。の質問の中で「例えば聴覚障害者のカウンセラーと健聴者のカウンセラーではどちらが相談しやすいか」と付け加えたことに対して、「健聴者の方が相談しやすい。周りに聴覚障害者がいないので、その大人の人と話したことがないので逆に話しにくいかも。」と話した。⑥聴覚障害専門のカウンセラーへの条件や望むことはどのようなことか。については、「手話ができる人で、聴覚障害について理解をしている人がいい。」と答えた。⑦聴覚障害専門ではないカウンセラーに望むことはなにか。という質問では、⑥の質問に付け加える形で「聴覚障害の人はほとんどの人が“聞こえるふり”をしてしまうので、ちゃんとわかったのかっていうのを確認してくれる人がいい。自分から言えない人もあると思うので。」と答えた。

4) カウンセリングでの手話について

⑧手話通訳を介したカウンセリングはどう感じるか。という質問では「手話通訳者がそばにいと話がいいにくいと思います。」⑨カウンセリングの中での手話はどのような印象があるか。という質問では、「(カウンセリングの中で) 手話を使えた方がいいと思います。」と話した。

5) 自分自身がカウンセラーであったら

⑩自分がカウンセラーになったら聴覚障害者にどのようなことをしたいか。について「その人の悩んでいることを聞いてあげられたらと思います。障害をもっているのは同じなので理解しあえると思います。」と話した。

(3) カウンセリングの必要性を感じたことがあり、カウンセリング経験がある
C子

1) C子に対する面接調査

C子はカウンセリングを利用した経験があり、カウンセリングやカウンセラーについて、どのようなものか知っていると言っている。Cへの面接調査では以下のような結果が得られた。

2) カウンセリング等のイメージについて

①カウンセラーについてのイメージはどのようなものか。という質問では、「話しやすいっていうか。自分からいいやういになっていう感じがあります今は。前は自分から話したいと思わなかったの。話したいとも思わなかったけど、ある時に自分から1回話してみようかなって思ったので話していました。どういう風にしてくれるのかなとかそういうのもあまりよくわからなかったの。ああカウンセリングの人がいるんだとしか思っていなかったです。」と話した。②カウンセリングについてのイメージはどのようなものか。の質問では、「悩みも聞いてくれたりして自分のいいところも教えてくれたりするので、今は困ったら相談しに行こうって思えるかなっていう。」と話した。

3) 聴覚障害者専門のカウンセラーについて

③聴覚障害専門のカウンセラーはいた方がよいか。の質問では、「私は口話でも問題ないんですけど、口話でもはっきりしゃべってくれたりとか、口の形がはっきりしてればいいと思うし、手話が使えればより話しやすい幅が広がるんじゃないかと思えます。」と話した。④聴覚障害専門のカウ

ンセラーがいないカウンセリングはどうか。の質問では、「実際口話がしゃべれない子が相談したいなって思って行ったとしても会話が成り立たないんじゃないかなって。筆談ができたとしても言葉で表すのが難しいので文章もあまりできないんじゃないかなと思うので、手話ができたならやりやすいんじゃないかなと思うかな。」と話した。⑤聴覚障害専門のカウンセラーがいたらカウンセリング利用するか。の質問では、「手話ができた方がお互いやりやすいんじゃないかなという意味では幅が広がるんじゃないかなと思います。」と答えた。⑥聴覚障害専門のカウンセラーへの条件や望むことはどのようなことか。の質問では、「条件としては、私だったら手話を使えた方がいいと思うんですけど、アドバイスがほしいっていうか。(自分が) 聾だけの世界になっているので、他の、一般の世界も知っているから、そのアドバイスを求めてたりするので、そういうのも相談の中でいってくれたりする方がいいかなというそれが条件かなと思います。」と話した。⑦聴覚障害専門ではないカウンセラーに望むことはなにか。という質問では、「もし手話が使えなくて、一方的に話しかけられてしまうとこっちから壁をつくっちゃうと思うので。そうすると聾のこと理解してないのかなって先入観にとらわれてしまうと思うので、『筆談が必要ですか?』とか相談の前に聞いてくれれば、筆談じゃなくて口話がいいですとか。もしかしたら自分から聞けないかもしれないので。そばに筆談の道具があれば、あ、理解してくてるのかなって思うので。そういうのがいいと思います。」と話した。

4) カウンセリングでの手話について

⑧手話通訳を介したカウンセリングはどう感じるか。の質問では、「私は口話でも問題ないので、ある意味ちょっと大変かなっていう。こっち（カウンセラー）見ながら、こっち（通訳者）も見るっていうので大変、わかる場所もあればわからないところで見なきゃいけないので、いてくれたら安心ではあるんですけど、できれば自分（カウンセラー）でできた方が、口の形とかまっすぐ見て集中して聴けるので、私だったら（カウンセラーがが）手話ができる方がありがたいかなって思います。」と話した。⑨カウンセリングの中での手話の印象はどのようなものか。の質問では、「手話を使えた方が安心感があるかなとは思いますが、口話だけでも問題は無いんですが、聞き返すのにも抵抗があるっていうか。（相手に）2回以上聞き返すと諦められちゃうっていうのがあるので必死に聞こうとするんですけど、やっぱり聞き返すのも申し訳ない気持ちになっちゃうので。手話ができる方が自信が一応持てるかもとは思いますが。」と話した。

5) 自分自身がカウンセラーであったら

⑩自分がカウンセラーになったら聴覚障害者にどのようなことをしたいか。という質問では、「聾の中にいると世の中を知らなさすぎると思われがちなので、そういうアドバイスとか、聾ならではの悩みとかを聞いて一緒に共感できるっていう。自分も相手の身になって考えたり、アドバイスしたりってできるカウンセラーになりたいかなって思います。」と答えた。

(4) カウンセリングの必要性を感じたことがなく、カウンセリング経験がない

D子

1) D子に対する面接調査

D子は、カウンセリングを利用した経験がなく、カウンセラーやカウンセリングについても言葉の意味は理解できるものの、どういうものかわからないため、「難しい」と何度も話、どう答えていいか考え込む様子が伺えた。D子への面接調査では以下のような結果が得られた。

2) カウンセリング等のイメージについて

①カウンセラーについてのイメージはどのようなものか。という質問では、考え込んでいたため「難しかったですか?」と聞くと、「カウンセラーっていう言葉はわかるけど、どんなっていうと、わからない。」と答えた。②カウンセリングについてのイメージはどのようなものか。の質問でも同じように考え込んだため、「悩みができたときは誰に相談しますか。」と聞くと、「相談室場所は保健室でしています。」と答えた。

3) 聴覚障害者専門のカウンセラーについて

③聴覚障害専門のカウンセラーはいた方がよいか。「思います。」と答えた。④聴覚障害専門のカウンセラーがいないカウンセリングはどうか。という質問では、「手話ができますか?」と調査者に聞いたため「手話ができる方がいいですか?」と尋ねると、「口話ができるから。」と答えた。その後、「(手話ができるか) もしくは筆談できるかが心配。(人に対して) 手話はあまり出せない。手話を使うときもあります。」と話した。⑤聴覚障害専門のカウンセラーがいたらカウンセリング利用するか。の質問では、「はい、したいと思います。」と答

えた。⑥聴覚障害専門のカウンセラーへの条件や望むことはどのようなことか。という質問では「特にはないです。」と答え、次の⑦聴覚障害専門ではないカウンセラーに望むことはなにか。という質問でも「ないです。」と答えた。

4) カウンセリングでの手話について

⑧手話通訳を介したカウンセリングはどう感じるか。という質問では、「通訳があるのでいいんですが、通訳さんがいないところで話ができの方がいいと思います。(手話ができなくても)口話ができるし、筆談もできるし、いない方がいいです。」と話した。⑨カウンセリングの中での手話の印象はどのようなものか。という質問では、「カウンセラーさんが自分で手話ができる人ならいいです。やりたいです。」と答えた。

5) 自分自身がカウンセラーであったら

⑩自分がカウンセラーになったら聴覚障害者にどのようなことをしたいか。については、考え込んだ結果「難しいです。」と答えた。

IV 考察

1. 来談選択に伴う妨害要因について

今回の調査では、聴覚障害を持つ高等部生が、カウンセリングやカウンセラーを必要と感じていること、聴覚障害を理解し、「手話」等の視覚言語でのやりとりができるカウンセラーがいれば来談するという語りが多く聞かれた。聴覚障害を持つ高等部生は、様々な世界を知りたいと思っており、健聴者ともいかにかわっていくか、どうしたらコミュニケーションがとれるかについてのアドバイス等を強く求めている。

る。

しかし、来談経験のある生徒が4人中2人だったことや情報の少なさから、今までそういったことにまで支援を行うカウンセラーが身近にいなかったということの表れでもあったと思われる。とはいえ対象者の少なさから断定的なことは言えない。

聴覚障害をもつ高等部生は、社会へ出ていきたい、社会と関わりたいという気持ちを強くもっていることが伺えたが、その気持ちを実現するには、聴覚障害を理解してくれる人が少なく情報も入ってきにくいいため、どうしても聴覚障害だけの世界になってしまうと思われる。そこには支援者側の聴覚障害者への「難しいだろう」という先入観や情報の少なさによる「わからなさ」や「行きたくなさ」があると思われる。聴覚障害について考えるときには「ことばの問題」が取り上げられるが、聴覚障害者にとってはまず聴覚障害について支援者がきちんと理解していることがカウンセリング来談の際にとっても必要なことである。ことばの問題は、障害を理解したその次のステップであり、障害を理解しているからこそ様々なコミュニケーションの手法がきちんとわかるのではないかとと思われる。

聴覚障害者の心の問題を考える際に、障害を理解することではなく聴覚障害者のコミュニケーションの問題にすり替えてきたのではないだろうか。聴覚障害をもつ高等部生は健聴者の世界も、聾の世界も、聴覚障害の世界も、とにかくいろいろな世界と関わることを望み、そのために幅広い情報を知りたいと願っている。そういった聴覚障害者ならではの心問題や障害の特性などを理解して支援してくれるカウンセラー

が、もっと身近にいることが求められていると考える。

聴覚障害者専門のカウンセラーや聴覚障害者カウンセラーの育成は一つの手段であり、カウンセラーは、何か一つの障害だけを理解し、他の障害を「難しいだろう」としてしまふのではなく、どの障害にもある一定の知識や理解をもって関わるができるようにする努力が求められていると思われる。

聴覚障害者が来談しやすい聴覚障害の文化に開かれた治療環境を整え、来談した際にはその障害を理解したカウンセリングが行えるよう、カウンセラーは日々学んでいく必要があると考えられる。

以上のことから、聴覚障害者の来談選択に伴う妨害要因は大きく5つあると言えよう。

- ①カウンセリングに関する情報の少なさ
- ②カウンセラーが身近な存在でないこと
- ③カウンセラーの聴覚障害への理解不足
- ④ことばの問題
- ⑤カウンセラー側の先入観が作り出す壁

2. 問題と今後の課題

今回の研究ではデータの少なさから断定的なことは言えないという問題がある。

この研究については今後は質問方法の検討や対象者の拡大、また発達段階や障害の程度を考慮し調査を進めていく必要があると考えられる。

謝辞

本論文を作成するにあたって、調査にご協力いただきました皆様、手話通訳派遣事務所の皆様、手話通訳者の皆様、調査には

ご協力いただけなかったものの調査依頼に丁寧に対応してくださり、アドバイスやご指導をいただきました皆様、ご指導いただきました野島一彦教授、検討していただきました野島研究室の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 栗村昭子(2005). 聴覚障害者のアセスメントに関する一考察. 関西福祉科学大学紀要第9号, 61-66.
- 藤巴正和(2002). 日本における聴覚障害者の臨床心理学に関する文献展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域 50, 355-361.
- Glickman, N. & Harvey, M. (2008). Psychotherapy with deaf adults: The development of a clinical specialization. JADARA (41)3; pgs.129-186.
- 村瀬嘉代子(1999) 聴覚障害者の心理臨床から問われること—この一書を編んで—. 村瀬嘉代子(編) 聴覚障害者の心理臨床, 日本評論社, 147-170.
- 滝沢広忠(1995). 聴覚障害者の心理的諸問題—中途失聴・難聴者のこころの悩みに関する調査から—. 札幌学院大学人文学会紀要, 58, 23-36.
- 滝沢広忠(1996). 聴覚障害者の心理臨床について. 札幌学院大学・杉山善朗教授退職記念論文集, 117-123.
- 滝沢広忠(1999). ろう者の精神保健に関する研究. 札幌学院大学人文学会紀要, 66, 45-55.
- 滝沢広忠(2002). 聴覚障害学生の精神健康に関する日米比較. 札幌学院大学人文

学会紀要, 71, 67-75.
滝沢広忠(2005). 北海道における新生児聴
覚スクリーニング検査と母親支援. 札
幌学院大学人文学会紀要, 77, 25-36.

田中久美子(2012). 聴覚障害者への心理臨
床の一考察. 京都大学大学院教育学研
究科紀要, 58, 315-325.